

2022年 12月 2日

博士学位請求論文要旨

論文題名 大学生における日常生活や学業への無気力に関する心理学的研究
—過去・現在の対人関係と無気力に対する感情に着目して—

提出者 林 雅子（中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程6年）

論文の要旨

1) 論文の主題（テーマ）と当該研究分野における位置づけ

本研究では、以下の2つの観点から研究を行った。

第一に、過去と現在の2つの時間軸から、日常生活に対する無気力と対人関係との関連を検討した。

大学生の無気力について、抑うつとスチューデント・アパシーの視点が混在して研究が行われていることが指摘されている（狩野・津川，2008，2011）。抑うつ的な無気力は、日常生活全般に対する意欲の減退であり、抑うつ状態と無気力状態を等価的に扱っているものである（下坂，2001）。対してスチューデント・アパシー的な無気力は、学業に対する意欲の減退であり、精神疾患による無気力とは異なるものとして定義づけられている（鉄島，1993）。質的に異なるはずのふたつの視点の無気力が混在したまま研究が続くと、それぞれに適した予防策や支援を講じることが難しくなる。そのため本研究では抑うつ的な無気力と、スチューデント・アパシー的な無気力のそれぞれの特徴を明らかにしていく。

抑うつ的な無気力について、臨床研究と調査研究で異なる見解が示されている。臨床研究では、過去の親の過保護・過干渉な養育態度や友人に対するふれ合い恐怖が無気力の促進に関連があることが示唆されていた（Walters, 1961 笠原・岡本 1972；深谷，1990；山田，1992 など）。一方で、調査研究では、現在の親や友人からのソーシャル・サポートが無気力の抑制に関連があることが示されている（福岡，2000；下坂，2001；本間・松田，2012 など）。即ち、臨床研究と調査研究で着目している対人関係の時間軸の相違から、無気力との関連の仕方に違いが表れている。

そこで、臨床と調査研究の両者の見解を繋ぎ合わせ、過去と現在の対人関係が、抑うつ的な無気力という日常生活に対する意欲の減退にどう関連するのか検討することを本研究の第一の研究課題とした。

第二に、大学生の無気力に対する感情に着目し、大学生が学業に対する無気力を如何に捉えているのか検討した。

スチューデント・アパシー的な無気力の学生は厳密には学業にだけ選択的に意欲が減退するわけではなく、学業を中心に大学生活などに対して意欲が減退することや（下山，1995；狩野・津川，2008）、時間の経過と共に無気力が深刻化すること（笠原，1984）が示

唆されている。したがって、無気力の範囲を検討するだけでは、抑うつ的な無気力との弁別は難しい。そのため、本研究では大学生の無気力に対する感情に着目した。

1970年代に臨床研究が行われていた当初、スチューデント・アパシーの学生は自分の状態に焦燥感や不安といったネガティブな感情を持たず、留学や退学の危機に瀕して周囲から言われてようやく相談室に赴くことが報告されている(笠原, 1984)。調査研究によると、学業に対して意欲が減退している学生は、抑うつ傾向の学生に比べあまり深く考え込まない傾向にあった(狩野・津川, 2008, 2011)。抑うつ的な無気力の学生は、憂鬱や落ち込みの気分が続くとされているが(桜井, 2000)、スチューデント・アパシー的な無気力の学生はそれに対して、あまり自分の状態を深刻に捉えず、焦りや不安のようなネガティブ感情を抱かないことが考えられる。

スチューデント・アパシーの学生が学業以外にも意欲の減退を示すようになるのは、周りと比較して自分だけができずにいることへ次第に焦りなどの感情が生じるためだと考えられている(笠原, 1984)。実際に、本間・松田(2012)の縦断研究においても、1回目から2回目までの3ヶ月間にストレス体験量が多く、適当なサポートを受けられなかった学生は、心理状態が悪化し無気力傾向が高まることが示されていた。したがって、スチューデント・アパシーの学生は、無気力になった当初はそれほど深刻に捉えていないが、無気力に対して適切な支援が行われず、その状態が続くと、やがてネガティブな感情が高まり、より広範な対象に意欲の減退を示すことが推測される。

だが、臨床研究で大学生の学業に対する意欲の減退が指摘された1970年代と現在とで、学生を取り巻く環境は異なる。多くの大学が、学生が主体的に学ぶ機会を設けつつあり(ベネッセ総合研究所, 2016)、学生自身も授業に対する態度は「まじめ化」(渡部, 2005)している。また、現在はコロナ禍により、友人関係を始め大学での交流が減少している。授業自体には出席できている一方、周囲との比較の機会が少なく、学業への意欲減退があっても、それほど焦りや不安が生じにくい状態なのではないか。現在の一般学生におけるスチューデント・アパシー的な無気力の新たな特徴が見られるか検討することが求められる。

このことから、学業へ意欲が減退するスチューデント・アパシー的な無気力における、大学生の感情に着目し、大学生が無気力をどのように捉えているのか明らかにすることを第二の研究課題とした。

これら2点の研究課題を踏まえて、曖昧な状態であった現在の大学生の無気力の実態を掴み、早期の段階での適切な支援策を講じることを目的とした。

2) 論文の構成(目次・各章の概要)

上述の検討課題を踏まえて、本研究では大学生の男女を対象に、横断調査、縦断調査、面接調査を含めた6つの調査を実施した。

Figure 1 に示したように、本研究は文献研究、実証研究、総合討論から成り、全体で8章から構成された。第1章が文献研究、第2章から7章までが実証研究、8章が総合討論である。各章の目的・構成と概要は以下の通りである。

第1章では、これまでの先行研究のレビューをし、本研究の目的と方針を明らかにした。まず、日本における無気力の定義づけを行った。次に、海外研究と比較しながら日本の無気力研究の流れを整理し、先行研究における限界点を述べた上で、それを改善する方法として本研究の方針を提示した。さらに、抑うつ的な無気力は過去と現在の対人関係とどう関連しているのか、親子関係、友人関係、教師との関係それぞれで整理を行った。また、スチューデント・アパシー的な無気力の特徴として、大学生の無気力への感情に着目し、コロナ禍において大学生が無気力をどう捉えているか検討した。最後に、本研究の目的と研究方法、構成をまとめた。

第2～7章の実証研究は大きくわけて3段階の構造を持つ。第1段階として第2～4章があり、第一の検討課題を明らかにするために大学生の抑うつ的な無気力と、過去と現在の対人関係に関して検討を行った。第2段階として、第5、6章では第二の検討課題を明らかにするために、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情に着目した調査を行った。第3段階の第7章では、第一、二の検討課題のまとめ上げとしてスチューデント・アパシー的な無気力に付随する様々な場面での無気力と、それに対する感情が、対人関係とどのように関連するのか検討した。

第2章では、112名の大学生を対象に過去の養育者の態度、現在の養育者からのソーシャル・サポートが、抑うつ的な無気力と関連があるのか検討した。第3章では、過去の友人に対するふれ合い恐怖、現在の友人からのソーシャル・サポートが、抑うつ的な無気力と関連が見られるか、244名の大学生を対象に明らかにした。第4章では、198名の大学生を対象として、過去の教師に対する信頼感、現在の教師からのソーシャル・サポートが、抑うつ的な無気力と関連するか分析した。

第5章では、スチューデント・アパシー的な無気力とそれに対する感情が時間の経過によって変化が見られるのか、縦断研究を行った。3回の調査すべてに参加した121名の大学生を分析対象とした。第6章では、大学生24名に対する半構造化面接によって、スチューデント・アパシー的な無気力の形成過程と、それに対する大学生の捉え方を調べた。

第7章では、これまでの研究を踏まえ、大学生274名を対象に、過去と現在の対人関係と無気力、無気力に対する感情との関連を検討した。スチューデント・アパシー的な無気力の傾向が高い学生は他の場面に対する無気力と、それに対する感情が、過去と現在の対人関係とどう関連するのか詳しく見た。

最後に、第8章では、本研究で得られた知見をまとめ、心理学的な見解を示し、総合討論を行った。

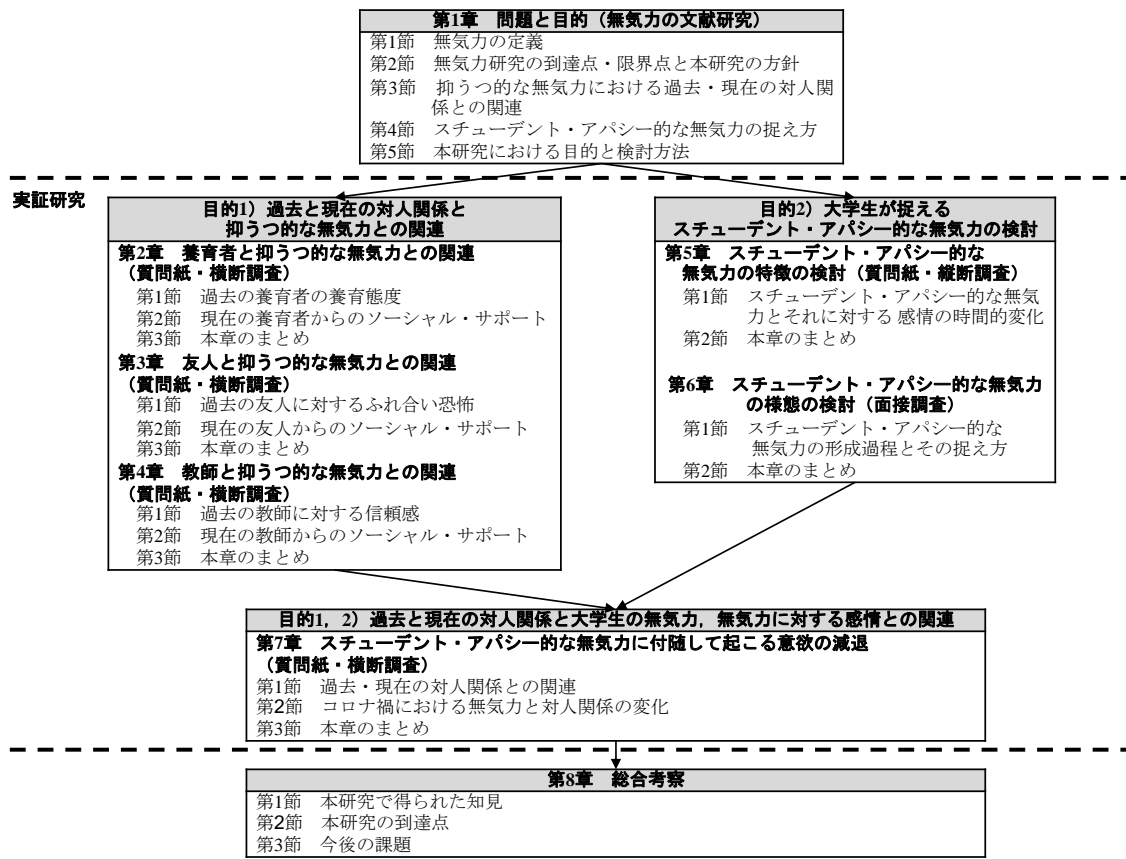


Figure 1. 博士論文の構成

3) 論文の独自性

本研究の独自性として以下の2点が挙げられる。

1点目は、過去と現在の対人関係と日常生活に対する無気力との関連を検討したことである。従来の無気力研究では、臨床と調査で着目している対人関係の時間軸が異なり、無気力と対人関係の関連の見解が分かれていた。本研究では両者の見解を繋ぎ合わせ、過去、現在の対人関係との関連を検討し、大学生の抑うつ的な無気力の実態を明確化した。結果、現在の親や友人だけでなく、過去の友人に対するふれ合い恐怖が無気力と関連することがわかった。現在の大学生の無気力にアプローチする際は、過去の友人関係の在り様を考慮することで、現在の対人関係からの支援をより効果的に発揮できるのではないだろうか。

本研究ではさらに、現在の対人関係について、具体的にどのような関係からのソーシャル・サポートが有効か明らかにした。母親、もしくは同じ大学・専攻または部活・サークルの友人からのソーシャル・サポートが無気力の抑制と関連することを実証した。加えて、本研究ではこれまで先行研究で注目されてこなかった過去、現在の教師との関係と抑うつ的な無気力に関連があることを明らかにした。現在の大学生は親よりも友人や教師といった勉学での対人関係を重視していることが考えられた。先行研究の見解を整理しただけでなく、現在の大学生の無気力に深く関わっている対人関係を明示したことは、本研究の独自性であると言える。

2点目は、学業に対する実態を明らかにし、大学生の無気力に対する捉え方の多様性を見出したことである。これまでの調査研究では抑うつ的な無気力と混在し、不明瞭な状態であったスチューデント・アパシー的な無気力について、本研究では無気力に対する感情に焦点を当てて明確化した。結果、スチューデント・アパシー的な無気力の学生は、自分が無気力であることに焦りや不安といったネガティブな感情を抱いていない一方で、心のゆとりがなく、時間が経過しても心のゆとりの増減に無気力は影響しないことが確認された。また、学業だけでなく自分の将来に対しても意欲の減退が見られた。スチューデント・アパシー的な無気力の学生は、実際は自分の状態をそれほど楽観的に捉えているわけではなく、将来に対する見通しも失っていることが明らかにされた。さらに、大学生が意欲のない状態をどう捉えるかで、無気力に対する感情は異なることも示唆された。例えば意欲のある状態とない状態、どちらも自分自身であると捉えていた場合、自分が学業に対して意欲が減退していたことを比較的肯定的に受け入れていた。学生の本業である学業に意欲が減退していることから、無気力研究ではスチューデント・アパシー的な無気力を不適切な状態として見なしていたが、大学生自身は無気力に対して多様な捉え方をしており、それを見出したことは本研究の独自性である。

また、スチューデント・アパシー的な無気力へのアプローチとして、周囲の環境を整えることが有効であると考えられた。本研究から、コロナ禍による授業形式の変化や友人関係の縮小が大学生の意欲の減退に影響していたが、一方で、現在の環境に適応していくことや、周囲が意欲的な環境に身を置くことで学業への意欲が向上していくことが示唆されていた。本人に働きかけるだけでなく、学業意欲を維持しやすいような環境づくりも重要であることが見出された。

4) 今後の課題

本研究の課題点として、次の3点が挙げられる。1点目は、調査対象に一定の偏りがあったことである。より結果を一般化するために、複数の大学で広範囲な調査を進め、こうした偏りを極力なくしていかなければならない。また、今回提示した無気力の学生への支援策をより具体的に検討していくべきである。

2点目は、調査期間の短さである。抑うつ的な無気力の検討はすべて横断調査であり、スチューデント・アパシー的な無気力における縦断調査も、短いスパンで行っていた。今後さらに長いスパンでの縦断調査や面接調査を行い、時間経過の中で無気力と諸要因との関連をさらに綿密に検証し、本研究の整合性を高めることが求められる。

3点目に、コロナ前とコロナ禍における調査が混在していたことである。抑うつ的な無気力と対人関係との関連について、第2章はコロナ禍に調査を行っていた一方で、第3、4章はコロナ前の調査であった。この2つを同質のものとして比較検討することは難しいであろう。コロナ禍の影響も踏まえて調査を行い、現在の大学生の無気力の実態をより正確に把握することが求められる。